

# 【無痛分娩についての説明文書】

## 【無痛分娩とは】

無痛分娩は、麻酔を用いることで痛みを少なくした分娩です。背中の神経をブロックして痛みを軽くすることが一般的です。「硬膜外麻酔」または「脊髄くも膜下硬膜外併用麻酔」という方法が用いられます。硬膜外麻酔は「硬膜外腔」、脊髄くも膜下麻酔は「脊髄くも膜下腔」と「硬膜外腔」という2つの場所に麻酔薬を投与する方法です。脊髄くも膜下麻酔単独で行う場合もあります。(図1)

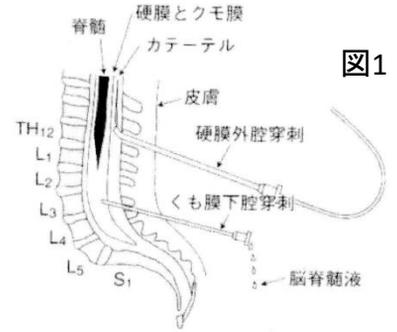


図1

どちらの方法でも、横になり背中をネコのように丸くしていただき(図2)、脊椎の骨と骨の間から注射を行います。硬膜外麻酔の場合、背中から細くて柔らかいチューブ(直径1mmぐらい)を入れ、そこからお産が終わるまで痛み止めの薬剤を注入します。そうすると、お腹から足、おしりにかけての感覚が鈍くなり、お産の痛みが和らぎます。

この麻酔の方法は、赤ちゃんへの影響がとても少ないことも知られています。細いチューブは腰骨の高さぐらいの背骨のところに入れます。皮膚に局所麻酔をしてから行うので、強い痛みがあることは多くありません10分ぐらいの処置です。



図2

無痛分娩を始めたあとは、ベッド上で過ごすことが一般的です。お産が終わったら、チューブからの薬剤注入を止めます。そうすると徐々に麻酔の効果が切れてきて、数時間後にはもとの状態になることが普通です。無痛分娩が終わったあとの過ごし方は、無痛分娩をしていないときと同じです。

## 【無痛分娩の安全性】

細心の注意をはらっても麻酔による副作用・合併症はゼロではありません。

硬膜外麻酔の命にかかわる不具合の原因として代表的なものが、「麻酔の効き過ぎ(高位脊髄くも膜下麻酔)」と「麻酔薬の中毒(局所麻酔薬中毒)」です。どちらも背中から入れた細いチューブが不適切な場所に入っているために起こる不具合です。残念ながら、注意深くチューブを入れる処置をしても、不適切な場所に入ってしまうことは完全に防ぎきれません。しかし、産婦さんの様子を注意深く観察しながら少しずつ薬剤を投与することで、重大な事態になる前にチューブが不適切な場所に入っていることに気づくことができます。また、万が一重大な状態になってしまったときに備えて、無痛分娩を行う施設には医療機器やトレーニングを受けたスタッフが配置がされている必要があります。

歩けない、排泄ができないなどの重い神経障害の原因のひとつが、血液が固まりにくいことです。そのため背中の麻酔を行う前には、血液の固まりやすさを確認し、重い神経障害を予防するようにしています。

以上のような重篤な不具合がおきないよう、無痛分娩を行うにあたり、点滴による血管確保、心電図モニター装着、胎児心拍モニタリングを行い、母児管理を厳重に行い、異常の早期発見に努め、安全な無痛分娩を提供できるようにしています。

## 【無痛分娩のメリット・デメリット】

### 【メリット】

痛みが少ないことです。「リラックスしてお産できた」、「体力を温存することができた」、「産後の回復が早かった」などの感想がよく聞かれます。

産婦さんの脳の血管、心臓に病気がある場合、より安全なお産をするために医師が無痛分娩を勧めることもあります。痛みを少なくすると、産婦さんの体の負担を減らすことができるためです。お母さんの血圧が高いとき(妊娠高血圧症候群)も、血圧を上がりにくくするために、また赤ちゃんに十分な酸素を届けられるように、無痛分娩を勧めることがあります。

### 【副作用や不具合】

無痛分娩中によく起こる副作用に、足がしびれる、尿が出せない、皮膚がかゆいなどがあります。ときどき起こる不具合として、分娩後の強い頭痛などがあります。

とてもまれながら重篤な不具合として、くも膜下迷入による呼吸抑制などの広範な麻酔効果(高位脊髄くも膜下麻酔)、血管内迷入によるショック様症状(局所麻酔薬中毒)、長期におよぶ神経障害などがあります。

またとても稀ですが背中に針を刺すときやカテーテルを抜くときに硬膜の外に血のかたまりができて神経を圧迫することがあります。よって血液の固まりやすさが正常かどうかを事前に評価する必要があります。

副作用ではありませんが、問題点として麻酔効果が不十分なことがあります。

### 【分娩への影響】

無痛分娩による麻酔によって、お産の進みが悪くなったり、お母さんのいきむ力が弱くなる場合があります。そのため、陣痛促進剤を使うことが増えたり、鉗子分娩・吸引分娩が増えることが知られています。また、無痛分娩を行うときには自然の陣痛を待たずに分娩を計画的に誘発する施設もあります。

### 【計画無痛分娩について】

当院では医療体制が十分整っている体制のもと行うという医療安全の観点から、原則計画無痛分娩を行っております。この方法は、陣痛が無い時点で入院し点滴で陣痛をつけて、痛みが出てきた時点から麻酔を開始するというものです。

日程や時間を調整できるというメリットがありますが、子宮頸管拡張や陣痛促進剤などの医療介入が必要となります。

医療法人 井上医院

参考資料: JALAホームページ 「無痛分娩に関する基本情報」